

## 日16-96

### 「ふきげんな過去」

★★★★★

2016(平成28)年7月6日鑑賞くテ  
アトル梅田>

監督・脚本：前田司郎

未来子（前科持ち、果子の伯母）／小泉今日子

果子（サトウの娘、女子高生）／二階堂ふみ

康則（謎の青年）／高良健吾

タイチ（果子の父、「蓮月庵」の経営者）／板尾創路

カナ（レイの10歳の娘）／山田望叶

サトエ（果子の母、未来子の妹）／兵藤公美

ヒサシ（果子の彼氏）／山田裕貴

ヒロシ（ヒサシの父）／児玉貴志

レイ（近所のスナック経営者）／黒川芽以

サチ（果子の祖母）／梅沢昌代

サチの亡き夫／大竹まこと

文房具屋の爺さん／きたろう

喫茶店の常連の男／齊木しげる

野村（蓮月庵の料理人）／AHMAD ALI

エリカ（果子の同級生）／相楽樹

エツコ（喫茶店のアルバイトの女性）／墨井鯨子

2016年・日本映画・120分

配給／東京アトル

＜朔子も良かったが、果子の「ひと夏の経験」は？＞

『ヒミズ』（12年）（『シネマーム28』210頁参照）を観て「二階堂ふみは第2の宮崎あおい！」と書いた私は、その後ずっと女優・二階堂ふみに注目してきた。そのほとんどを高く評価している彼女の出演作の中でも、私がベストと思っているのは、深田晃司監督の『ほとりの朔子』（13年）（『シネマーム32』115頁参照）。同作は、私の大好きな女優兼プロデューサーである杉野希妃が、私が絶賛した『歓待』（10年）（『シネマーム27』160頁参照）の深田晃司監督と再び組み、私の大好きな女優・二階堂ふみと鶴田真由を起用した、すばらしいオリジナル作品だった。同作のテーマのひとつは、朔子の「ひと夏の経験」。しかして、そもそもタイトルからして意味深だが、2週間の夏休みを海のほとりの町で叔母と二人で過ごす18歳の女の子は、どんな「ひと夏の経験」を？

そんな『ほとりの朔子』と好対照をなすのが、1997年に旗揚げした劇団「五反田団」で注目されている1997年生まれの前田司郎監督が、二階堂ふみと小泉今日子をW主演させた本作。小泉今日子は『トキヨウソナタ』（08年）（『シネマーム21』280頁参照）の演技で私が注目した女優だが、NHKの朝ドラ『あまちゃん』や多くの舞台での演技はもちろん、近時は舞台演出や書評でも大活躍している才女だ。

二階堂ふみ演じる果子は18歳の高校生、小泉今日子演じる未来子は果子の伯母さんという設定だが、前科者で死んだはずの未来子が、ある日突然「葛飾柴又のとうや」ならぬ北品川のエジプト風豆料理屋「蓮月庵」に現れ、「かくまってよ」と居候を決め込んだところから興味深いストーリーが展開していく。朔子のひと夏の経験は『ほとりの朔子』で明らかにされたが、本作における果子の「ひと夏の経験は・・・？

＜北品川の運河にワニがいる？＞

本作は、二階堂ふみ演じる果子のアップのシーンから始まる。当初それが何を見ている顔かわからなかったが、カメラが引くにつれて、その目の先には北品川の運河が。果子の横から、ギターケースを持った彼氏らしい男ヒサシ（山田裕貴）がさかんに果子に話しかけてくるが、果子は運河を見たままだ。会話の様子から、果子はワニを探しているらしいこと、その目の先には鉛を持って運河を見ている海苔の本田の奥さんがいるが、どうもそれは、自分の赤ん坊をさらっていったワニに復讐するためらしいことがわかってくる。しかし、今ドキ北品川の運河にワニがいるの？

また、果子はヒサシからの「どっか行こうぜ」の誘いに、「どこ？」、「どこがいい？」の会話を経て、「ここじゃない世界」と答えるが、その意味がヒサシにわかるはずはないから、「は？何言ってんのお前」と会話は噛み合わない。さらに、「俺、お前の曲作正在いい？」と聞くヒサシに対して果子は、辛辣な理由を並べて拒絶の言葉を・・・。どうも、果子には未来が見えるらしい。

後に果子は高校3年生だとわかるが、これでは果子とヒサシの会話は、まるで大人と子供。男（ヒサシ）の単純さと、女（果子）のエキセントリックな複雑さがこの冒頭の会話だけですぐにわかるうえ、『ふきげんな過去』というタイトルの意味も、なるほど、なるほど・・・。それにしても、『味園ユニアース』（15年）（『シネマーム35』未掲載）でも無愛想な表情が似合っていた二階堂ふみには、こんな不機嫌な顔がいかにもピッタリ！

＜「とうや」は草だんご、「蓮月庵」はエジプト風豆料理！＞

本作の主な舞台は、北品川にある、果子たち家族が住む木造2階建ての建物。1階にある「蓮月庵」の経営者は果子の父親のタイチ（板尾創路）で、料理人は中東からやって来ている野村（AHMAD ALI）だが、そこで豆を剥くのは、祖母のサチ（梅沢昌代）、母のサトエ（兵藤公美）たち女の仕事らしい。本作では女たちが豆を剥くシーンが何度も登場するが、そこで展開される女たちの会話が本作のストーリーを誘導していくので、それに注目！

高校生の果子も、学校から帰った直後などに時々それを手伝っているようだが、その姿勢はかなりおざなりで、熱心に手伝っている雰囲気ではない。他方、「蓮月庵」の名物は野村が考案したエジプト風豆料理。ストーリーの展開中、その調理過程の一部が登場するが、それをゆっくり味わっているシーンが登場しないのは、少し残念。もっとも、ある客が食べているその料理を見ている限り、それほどおいしそうには思えなかつたが・・・。

『男はつらいよ』シリーズでは、フーテンの寅さんが活躍する舞台は毎回あちこちに移動するが、帰って来る場所は葛飾柴又にある、「おいらん」の車籠造が経営し、妹のさくらが手伝っている「とうや」に決まっている。また、「とうや」の名物は草だんごだが、草だんごもエジプト風豆料理も、それはあくまで映画を引き立てるための小道具で、『男はつらいよ』シリーズでは、そこに戻ってくる寅さんの登場ぶりが毎回の見物になっている。

しかし、本作でも死んだはずの未来子が登場してくるのはこの「蓮月庵」に決まっているが、それは一体、いつ、どんな状況で？

＜「蓮月庵」に未来子が登場！＞

そう思いながら観ていると、本作に見る未来子の登場はまさに絶妙のタイミング。今日も店の夜の開業に向けて、赤ん坊を背負ったサトエとサチ、近所でスナックを経営しているレイ（黒川芽以）の10歳になる一人娘カナ（山田望叶）と、学校から帰ったばかりの果子の4人が豆剥きをやっている時、突然ドアを開けて入ってきたのが未来子だ。この時、レイは店の奥で作業をしており、タイチは冷房器具の部品の修理に夢中になっていたうえ、4人の女たちは手元の豆剥きの作業に集中していたから、客が入ってきて、サトエの「すいません。まだ、やってないんで」の声だけに対応したが、それでも客は出ていく気配がないため、一同が玄関を見てみると・・・。十数年ぶりの再会、しかも、死んだはずの未来子との再会シーンをシリアスに演ずる本作のベテラン俳優たちを中心とした演技は、さすがにしっかりしたものだから、本作前半のこのハイライトシーンに注目！

もっとも、「再会」は果子以外の人たちの話で、果子にとって未来子ははじめて見る女性。この人が噂をしていた、死んだはずの伯母さんの未来子。この人は犯罪者？それに、死んだんじゃないかったの？そんな女から「美人ね。私に似てる」と言われても・・・。果子は憮然として「似てません」と言い返し、そんな姿を見たサチは未来子に対して「なんかいつも怒ってるんだよ」とコメントしたが・・・。

＜3人、三世代の女の哲学論争（禅問答？）に注目！＞

『男はつらいよ』シリーズでは、フーテンの寅さんが活躍する舞台は毎回あちこちに移動するが、帰って来る場所は葛飾柴又にある、「おいらん」の車籠造が経営し、妹のさくらが手伝っている「とうや」に決まっている。また、「とうや」の名物は草だんごだが、草だんごもエジプト風豆料理も、それはあくまで映画を引き立てるための小道具で、『男はつらいよ』シリーズでは、そこに戻ってくる寅さんの登場ぶりが毎回の見物になっている。

しかし、本作でも死んだはずの未来子が登場してくるのはこの「蓮月庵」に決まっているが、それは一体、いつ、どんな状況で？

＜「蓮月庵」に未来子が登場！＞

本作では、一方では全編を通じて果子の不機嫌な顔が貫かれており、他方では未来子のミステリー性が貫かれている。そして、そんな未来子を女優・小泉今日子が「怪演」している。また、未来子のミステリー性は、果子の部屋における、黒いドロドロしたペットボトルを巡る果子と未来子の「論争」と、ヤスノリちゃん事件が爆弾に絡んでいたことの説明の中で、とりわけ明らかになってくる。その挙げ句、未来子は「あんた、今日、夜暇？」と聞き、果子を「夜の国」に案内することに・・・。

しかし、本作でも死んだはずの未来子が登場してくるのはこの「蓮月庵」に決まっているが、それは一体、いつ、どんな状況で？

＜北品川の運河にワニがいる？＞

本作は、二階堂ふみ演じる果子のアップのシーンから始まる。当初それが何を見ている顔かわからなかったが、カメラが引くにつれて、その目の先には北品川の運河が。果子の横から、ギターケースを持った彼氏らしい男ヒサシ（山田裕貴）がさかんに果子に話しかけてくるが、果子は運河を見たままだ。会話の様子から、果子はワニを探しているらしいこと、その目の先には鉛を持って運河を見ている海苔の本田の奥さんがいるが、どうもそれは、自分の赤ん坊をさらっていったワニに復讐するためらしいことがわかってくる。しかし、今ドキ北品川の運河にワニがいるの？

また、果子はヒサシからの「どっか行こうぜ」の誘いに、「どこ？」、「どこがいい？」の会話を経て、「ここじゃない世界」と答えるが、その意味がヒサシにわかるはずはないから、「は？何言ってんのお前」と会話は噛み合わない。さらに、「俺、お前の曲作正在いい？」と聞くヒサシに対して果子は、辛辣な理由を並べて拒絶の言葉を・・・。どうも、果子には未来が見えるらしい。

後に果子は高校3年生だとわかるが、これでは果子とヒサシの会話は、まるで大人と子供。男（ヒサシ）の単純さと、女（果子）のエキセントリックな複雑さがこの冒頭の会話だけですぐにわかるうえ、『ふきげんな過去』というタイトルの意味も、なるほど、なるほど・・・。それにしても、『味園ユニアース』（15年）（『シネマーム35』未掲載）でも無愛想な表情が似合っていた二階堂ふみには、こんな不機嫌な顔がいかにもピッタリ！

＜「とうや」は草だんご、「蓮月庵」はエジプト風豆料理！＞

本作の主な舞台は、北品川にある、果子たち家族が住む木造2階建ての建物。1階にある「蓮月庵」の経営者は果子の父親のタイチ（板尾創路）で、料理人は中東からやって来ている野村（AHMAD ALI）だが、そこで豆を剥くのは、祖母のサチ（梅沢昌代）、母のサトエ（兵藤公美）たち女の仕事らしい。本作では女たちが豆を剥くシーンが何度も登場するが、そこで展開される女たちの会話が本作のストーリーを誘導していくので、それに注目！

高校生の果子も、学校から帰った直後などに時々それを手伝っているようだが、その姿勢はかなりおざなりで、熱心に手伝っている雰囲気ではない。他方、「蓮月庵」の名物は野村が考案したエジプト風豆料理。ストーリーの展開中、その調理過程の一部が登場するが、それをゆっくり味わっているシーンが登場しないのは、少し残念。もっとも、ある客が食べているその料理を見ている限り、それほどおいしそうには思えなかつたが・・・。

また、果子はヒサシからの「どっか行こうぜ」の誘いに、「どこ？」、「どこがいい？」の会話を経て、「ここじゃない世界」と答えるが、その意味がヒサシにわかるはずはないから、「は？何言ってんのお前」と会話は噛み合わない。さらに、「俺、お前の曲作正在いい？」と聞くヒサシに対して果子は、辛辣な理由を並べて拒絶の言葉を・・・。どうも、果子には未来が見えるらしい。

後に果子は高校3年生だとわかるが、これでは果子とヒサシの会話は、まるで大人と子供。男（ヒサシ）の単純さと、女（果子）のエキセントリックな複雑さがこの冒頭の会話だけですぐにわかるうえ、『ふきげんな過去』というタイトルの意味も、なるほど、なるほど・・・。それにしても、『味園ユニアース』（15年）（『シネマーム35』未掲載）でも無愛想な表情が似合っていた二階堂ふみには、こんな不機嫌な顔がいかにもピッタリ！

＜「蓮月庵」に未来子が登場！＞

本作では、一方では全編を通じて果子の不機嫌な顔が貫かれており、他方では未来子のミステリー性が貫かれている。そして、そんな未来子を女優・小泉今日子が「怪演」している。また、未来子のミステリー性は、果子の部屋における、黒いドロドロしたペットボトルを巡る果子と未来子の「論争」と、ヤスノリちゃん事件が爆弾に絡んでいたことの説明の中で、とりわけ明らかになってくる。その挙げ句、未来子は「あんた、今日、夜暇？」と聞き、果子を「夜の国」に案内することに・・・。

しかし、本作でも死んだはずの未来子が登場してくるのはこの「蓮月庵」に決まっているが、それは一体、いつ、どんな状況で？

＜「蓮月庵」に未来子が登場！＞

本作では、一方では全編を通じて果子の不機嫌な顔が貫かれており、他方では未来子のミステリー性が貫かれている。そして、そんな未来子を女優・小泉今日子が「怪演」している。また、未来子のミステリー性は、果子の部屋における、黒いドロドロしたペットボトルを巡る果子と未来子の「論争」と、ヤスノリちゃん事件が爆弾に絡んでいたことの説明の中で、とりわけ明らかになってくる。その挙げ句、未来子は「あんた、今日、夜暇？」と聞き、果子を「夜の国」に案内することに・・・。

しかし、本作でも死んだはずの未来子が登場してくるのはこの「蓮月庵」に決まっているが、それは一体、いつ、どんな状況で？